

# 愛隣館研修センターニュース

〒612-8141 京都市伏見区向島二ノ丸町 151 Tel:075-621-3849 Fax:075-621-1579

mail to: info@airinkan.net https://airinkan.jesusbond.jp 振替:01020-5-39321

編集発行所: 社会福祉法人イエス団 愛隣館研修センター 発行責任者: 平田 義

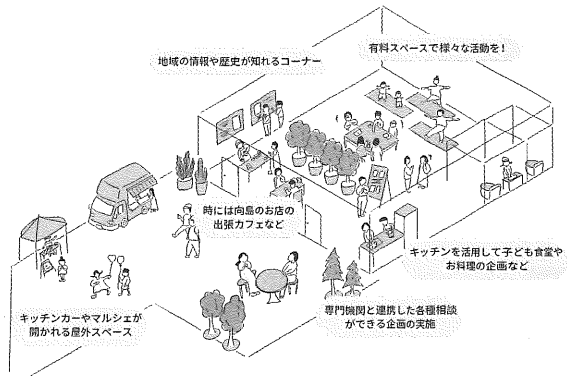
## 119号

## 向島に、新しい地域交流スペースが誕生しました！

向島中学校を京都市が売却し、買い取った事業者が病院と戸建て住宅を建てることになっています。

そこに、地域の交流スペースも建設されることになり、まもなくオープンいたします。

これまでの経緯と今後どんな場所になるのかを、向島地域交流スペース運営委員会のFさんに聞いてみました。(平田 義)



H: 「Fさん、ついに新しい地域交流スペースが完成しますね。」

F: 「そうやねえ。楽しみやねえ。」

H: 「どこに出来るんですしたっけ？」

F: 「元向島中学校の跡地ですよ。」

H: 「なんでそこに出来るんですか？」

F: 「向島中学校が閉校になったんやけど、その場所を『むかちゅうセンター』という名前地域の人たちが集まれる場として活用してたんですよ。」

H: 「へえ～そうだったんですね。その『むかちゅうセンター』ではどんな活動がされていたんですか？」

F: 「そらあ沢山あったよ。30以上の団体が使っていたよ。」

H: 「30以上ですか。スゴイですね。」

F: 「グラウンドではラグビースクールやサッカークラブ、グラウンドゴルフ、体育館ではインラインスケートやフィリピンの方々がバスケットをやってはったなあ。あと、向島ユースセンターの取組みで毎週金曜日に中学生が『むかちゅうセンター』に来て体育館や元教室で楽しく過ごしてたんですよ。」

H: 「むっちゃ、いいですよん」

F: 「教室を使っは、中国帰国者の皆さんが毎日集まって来てはったし、介護予防も兼ねて歌を唄う活動もありましたなあ。あと、地域の団体が会議をしたり、映画会などのイベントもしょっちゅうやってましたわ。」

H: 「へえ～そうなんですね。『むかちゅうセンター』で新

しい活動も始まりましたってたんですか？」

F: 「そうやね。一つは『子どもおとな食堂ひまわり』があるね。二ノ丸学区社協、二ノ丸北学区社協、民生委員かいきょうりよく、まいつきかいしよくが協力を、毎月1回の食堂が始まったんも『むかちゅうセンター』からやったなあ。」

H: 「他には何かありますか？」

F: 「団地カフェかな。」

H: 「何ですかそれ？」

F: 「これまでも、地域の高齢者が集まれる集いはカレー喫茶とか、ランチクラブとか健やかサロンとかあったんやけど、認知症でなかなか自ら集まることができないような方にも気軽にきていただけるように伏見区社協や包括支援センターなどの方と取組みを始めたんが『団地カフェ』やね。」

H: 「『むかちゅうセンター』があったからいろんな活動が始まっていったんですね。」

F: 「そうなんやけど、それだけやなく、大事やったんは、7年前に『向島まちづくりビジョン』が策定されたことが大きかったと思うよ。」

H: 「そうなんですね。」

F: 「向島5学区の人たち、向島の様々な事業者や学識の方々とつくりあげたビジョンなんよ。多文化・多世代共生の街、暮らし心地の誇れる街にしようどビジョンをつくったんよ。」

H: 「そのビジョンを進めていくために、『むかちゅうセン

ター』が使われていたってことなんですね。」

F:「そうなんよ。でもその『むかちゅうセンター』があった向島中学校跡地を京都市は売却することを決めたんよ。」

H:「アカンやん！これだけ地域の人たちが集える場所で、ビジョンが叶えられる場所が無くなったらどないするのん？」

F:「そのとおりなんよ。だから、京都市は5街区の集会所と5街区5棟101号室、愛隣館地域交流室を地域の方々が活動を継続出来る場所として確保してくれたん。それと同時に、『むかちゅうセンター』を売却する際に、購入する事業者に対して、向島まちづくりビジョンを具現化する地域交流スペースを建設することを約束させたんよ。」

H:「なるほど。だから、新しい地域の交流スペースが出来るといことなんですね。」

F:「そうなんやけど、今日聞いて欲しいことは、まだあるんよ。」

H:「はい、なんでしょう。」

F:「大事なのは、新しくできる地域交流の場所が、『向島まちづくりビジョン』が具現化されるとこにしないとアカンと思ってるんよ。向島5街区の多様な世代の方々が交流でき、住民同士のつながりが生み出される場所にしたいんよ。」

H:「いいですねえ。」

H:「そのためにはどうしたらいいんですか？」

F:「今、ワークショップや検討委員会を重ねながら試行錯誤しているところなんです。単なる貸し会館でなくて、気軽に住民の方が集って来て、困りごとが相談できたり、向島の歴史が知れたり、いろんな情報が知れたりできるような場所になっていけばいいあと考えているんよ。」

H:「そうなんですね。ということは、これからその場所を活用するいろんなアイデアを提案していても大丈夫ということなんですね。」

F:「もちろん！向島が元気になる活動を新しい場所を使って一緒にやっていきましょう！」

## 子ども、若者の居場所に

NPO法人 きょうと藤の木セカンドハウス 山内忠敏

保育園の食育のお手伝いを始めて10数年、保育園に隣接して児童館があるので、園庭で野菜の世話をしていると児童館を利用している卒園生から声がかかり、その内に児童館とつながりができ、子ども達とのつながりが増えてきました。多くの子どもと知り合い、団地内やスーパーなどで会うと声をかけてくれる子どもが増えてきました。

児童館は午後5時までなので、子ども達は家に帰って夕食を家族と一緒に食べるだろうと漠然と思っていました。あるとき、仲間から子どもが夜になっても外で遊んでいると聞かされビックリしました。それも寒い時期でした。

その頃全国的に子ども食堂の広がりが増えてきており、「藤ノ木にもあるといいな！」となり、京都市住宅局や関係の皆様のお力で開設にこぎ着けることができました。始めるにあたって、他団体の活動を調べたりをして、藤ノ木ではどのような運営をしていくのか討論を重ね活動方針を決めました。

次世代になう小学生が安心、安全に過ごせる場所にする。そこでは食事を提供すると共に学習の指導も行う。更に小学生だけでなく若者の居場所とする。また、外国にルーツを持つ人達との交流の場とする。そのうちに高齢者にも参加してもらって、全世代がここをよりどころになれるようにとの思いで名称を「藤の木セカンドハウス」と決めました。

子ども食堂を始めようとしてから一番頭を悩ませていたのが、運営資金の確保でした。備品、電化製品などの初期費用、活動が始まると食材等の費用をどうして確保するかでした。幸い京都府、京都市の開設補助金を始め民間団体の助成

金に応募し、何とか開設までに当座の資金を確保できました。

少し前までは子ども食堂は貧困家庭の子どもが行くところと言われていたが、私達は全く気にしていません。色々な環境にある子ども達も喜んで来てくれれば良いのです。また国籍も問いません。むしろ色々な国の子どもにも参加してもらいたいと思っています。違う文化、言語を持つ子どもと一緒に学習、食事、遊びを共にすることでお互いを知って貰えればと思っています。

月2回の開催ですが前月の初めに翌月の献立を決めます。季節を感じられるか、子ども達が喜ぶか、栄養のバランスは取れているか等を考えて決めます。そうして作った料理を喜んでくれ、「お代わりください！」と言ってくれると嬉しくなります。

子ども食堂を軸に広がりが始まろうとしています。高齢者が集まる「おしゃべりサロン」では子ども達が食事の時に使うランチョマットを作り始めました。皆さん手縫いで一针一针縫ってくださっています。子ども達にお披露目するのは少し先になりますが、子ども達の反応が楽しみです。

赤ちゃん和妈妈がゆっくりと過ごせる「ママ&赤ちゃん広場」も始めました。赤ちゃんに保育士さんが遊びを、ママにはくつろぎのひとときをご用意しています。



藤ノ木セカンドハウスにて

# 向島まつり 2024 大盛況!

僕は向島が好きだ。向島にいると心地良い。向島まつりの時はさらに強く思う。なぜだろう?

10月27日(日)、「向島まつり2024」が開催された。今回で18回目(前身の秋の祭典等含む)だ。主催者発表では約2,000人の来場者!大盛況だった。

今回の特徴は、これまで前日に前夜祭として多文化イベントを行っていたが、今回は一緒に開催したことだ。向島が学生センターの留学生や外国ルーツの住民による「我が国の文化紹介」では言葉クイズやスタンプラリーがあり、また、模擬店ではインド・ネパール・ペルー・メキシコ・ベトナム等々のブースが並び、食べ物や装飾品、展示などにより様々な国の文化に触れることができた。京都文教大学の馬場先生のゼミも、世界のユニークな楽器展示や手作りお菓子販売、子ども向けに世界のぬり絵をするなど学生も盛り上げていた。

また、呼び物の地元農家による「朝採り新鮮野菜市」や医療・福祉事業所による「健康チェックコーナー」、子ども新聞ワークショップやまと当て等の子どもコーナーもさらに充実し、乳幼児から小中学生の子どもたちもたくさん遊びに来てくれた。模擬店の「お昼過ぎにはほぼ完売状態」も恒例!地域通貨「むっか」も定着していた。

ステージでは、小中学生の吹奏楽部の演奏、ヒップホップダンスやバトンワリング等あり、西アフリカの太鼓の演奏では観客もステージに飛び込み出演し、ステージと観客席が一体となって全体がさらに盛り上がった。例年、後半は人が少なくなるが、今年は最後まで観客席がいっぱいだった。

このように、「向島まつり」では、子ども・若者・大人・高齢者・障がいのある方・外国ルーツの方等々が一斉に集い、それぞれのブースでも交流が芽生え、多文化・多世代交流が自然にできている。住民の手作りのイベントだからなおさら親しみやすさを感じる。また、向島・向島南学区からもお手伝いたくさん来て頂いて、自転車整理等もスムーズだった。5学区全体で作っているまつりであり、人と人とをつないでいるのだと改めて実感した。

向島まつりは、向島まちづくりビジョンが掲げる「多文化・多世代共生の街」「暮らし心地を誇れる街」を具現化している一日と言えよう。向島は、互いに違いを認め合い、寄り添う土壌があると感じる。だから心地良いのかな。そう思える人をもっと増やしたいな。(「あいりん」佐藤雅裕)

## 向島二ノ丸学区二の丸北学区合同防災訓練に参画して 浅田将之:愛隣グループホーム・二ノ丸学区自主防災会

11月10日(日)午前9時に京都南部に震度5強の地震が発生した想定で、二ノ丸学区と二の丸北学区とが合同で防災訓練をおこないました。晴天にも恵まれ、二ノ丸学区69名、二の丸北学区178名、合計247名の参加者がありました。京都市立秀蓮小中学校を避難場所とする2学区が合同で訓練をおこなうのは初めてのことであり、あってはならないことですが大規模地震の発生を想定して、合同でおこなえたことは学区単位での役割分担や連携等の観点からもとても有意義なことでありました。

当日は1街区、5街区では、それぞれ集会所から防災訓練の放送で住民の皆さんに訓練の開始を呼びかけ、住民の皆さんには①家庭での初動処置訓練(自分の身の安全を守る)②速やかに地域の集合場所に集合し、安否確認(点呼)訓練③集合場所から秀蓮小中学校(避難所)まで通学路を歩いて徒歩で移動をしていただきました。

避難所では、10時の開会式の後「避難所運営の説明」「段ボールベッドの組立訓練」「消火訓練」「炊き出し訓練」をおこない、災害時の行動について学びました。炊き出し訓練では大鍋でつくられた約300食の豚汁を皆さんに食べていただくことができました。

地域住民の中には高齢の方も多く、また障がいのある方、外国籍の方もおられます。地域単位でおこなわれる住民活動に参加していただくことで、出会い、気づきが生まれ、万が一の災害時、集合の際に、また移動の際に、そして避難所においてどのような配慮が必要となるのか、住民同士で考えるよい機会にもなりました。愛隣デイサービス、障がい児・者ホームヘルプサービスゆうりんのご利用者、愛隣グループホームの入居者にも参加していただけたのはとても貴重であったと思います。秀蓮小中学校の先生方、向島消防出張所の習員のみなさま、また向島消防分団の方々に、多大なご協力をいただきましたこと、あらためまして感謝申し上げます。

### 【愛隣グループホームから参加された入居者の声】

◆西尾真紀さん(愛隣 GH):防災訓練に行って勉強になった。家族、近所の人、友達と一緒に地震に備えてくださいと言ってはった。一番大事なのは寝ている時に地震が起きることがあるから、高いところに荷物を置かないようにすること。トイレがない時はマンホールを使って TENT を広げてマンホールトイレをつくります。マンホールトイレがない時は、袋を使ってもトイレを使えるようにできます。ようかと水とわかめご飯をもらった。消火訓練もしていい勉強になった。豚汁はおいしかった。

◆赤井麻美さん(愛隣 GH):地域の人と一緒にエレベーター前に集合して秀蓮小中学校まで歩いて行った。お話を聞いて、豚汁を食べた。美味しかったのでおかわりした。

◆木村拓貴さん(愛隣 GH):地震が起きたら頭を隠して守ること、揺れがおさまったら、エレベーターの前に集合して、みんなで避難所に移動する練習をして、消火訓練もした。豚汁がおいしかったのでおかわりした。また行きたい。

# おきなわへい わ けんしゅう お 沖縄平和研修を終えて

戦後79年の今年、“平和行進”を含む5日間の沖縄研修(2024/6/22-26)に参加させていただきました。正直、広島・長崎への米軍からの原爆投下に関する多少の知識はありましたが、沖縄県やその周辺の小さな島々が戦場となり、たくさんの市民が犠牲になったことはあまり知らなかったのが、勉強するいい機会だと思ったのが参加のキッカケです。

今回の研修で学んだこと、感じたことは、犠牲者はいつも弱者である！ということ。そして当然のことですが、“二度と戦争を起こしてはいけない”ということです。“対馬丸事件”、“3ヶ月ほどにもおよぶ沖縄地上戦”、“ひめゆり学徒隊”などにかりだされた学生達、またそれ以外にも、自然にできた洞窟等に隠れて生活していた人達が未来を悲観し、米兵からの呼びかけに応じることなく強制集団死するなど、たくさんの民間人が亡くなりました。

沖縄に着いてまず向かったのは小さな子どもたちが犠牲となった対馬丸について学べる“対馬丸記念館”です。館内は薄暗く当時の船内を思わせるつくりになっていました。

そこに本当にたくさんの犠牲者の方々の写真が壁いっぱいには貼られていました。

皆が眠るにつれた夜の10時過ぎに米軍の潜水艦からの攻撃を受け、真っ暗な海へと投げ出された子どもたち。船に乗り込むときは“疎開”の意味もわからずちよとした旅行気分だった子どもたくさんいたと聞きます。その航路の途中で足の届かない真っ暗な海でさまようことを余儀なくされた子どもたち。友達や先生とも離ればなれになりとても怖かったでしょう、寂しかったでしょう、そして苦しかったでしょう。また、生き残った人たちにも日本政府から、沈没の事実を口外しないようにと監視されるなど、生きづらい日々を過ごされていたようです。戦争が何の罪もない皆さんの大人から子どもまでの平和な日常を奪い生命までも奪ってしまったのです。そして今、沖縄には多数の米軍基地やその関連施設があります。

現在も辺野古に米軍基地をつくらうと海岸線に埋め立てる為の土砂が毎日のように運ばれています。その現状を金井創さんの船で海から視察させていただきました。

たくさんのブイ等で、進入できないようになっていて、また

その内側には常に海上保安庁の巡視艇が偵察して



辺野古にて

いました。案内して下さった金井創さんの説明によると、辺野古の海岸を埋め立てている為、毎年やってくる“アジサシ”という渡り鳥の数が激減したり、希少生物である“ジュゴン”や“ウミガメ”のえさになる海草(うみくさ)が育たなくなったり、“ウミガメ”の産卵地である海岸線も埋め立て中のためそれらが近寄らなくなってしまいました。海の中で生息している“サンゴ”も埋め立ての被害者です。島民からの訴えにより移植された“サンゴ”も結局は環境の変化に対応できず約8割が死滅してしまったそうです。

海で生きている生物を殺したり近寄りたくしたりして作り上げようとしているもの…それが戦争の準備をするための軍事基地なのです。またその海を埋め立てている土砂は沖縄戦の舞台にもなった土地から土砂を運んでくるそうです。その土砂の中にはまだ遺骨が残っている可能性もあるというのに、その土砂を使って米軍基地を作ろうとしているのです。人道的にも腹立たしい行為だと思います。

また基地があるということはその場所には戦争をするための武器・兵器・弾薬などを備えているということです。それは今後、日本ではなくてもアメリカとどこかの国が仮に戦争を起こすようなことがあれば、相手国から一番初めに狙われるのは武器等を備えている場所だと専門家も発言しています。

日本政府は“国や国民を守るため”という名目で進めている基地建設。これが再び沖縄を戦場にする可能性があるということを知っていただきたいです。そして“戦争は決して起こしてはいけない”と声をあげていかなければ、そう改めて感じた5日間でした。

今もお、世界のどこかで戦争が起き、民間人が犠牲になっています。こんな日が一日も早くなくなるよう発信していきたいです。大好きな沖縄とその周辺の海をきれいなまま後世に残すために。(那波雅俊)

## 新愛隣館建設後の募金のお願い

～インクルーシブ社会の実現を！～

2021年4月より、新愛隣館に戻ってまいりました。建築費用は、自己資金と借入金のみで賅っております。つきましては、皆さまからのお支えを引き続きお願いしたいと思います。これまでも、多くのお支えをいただいておりますが、重ね重ねのお願いで恐縮ですが、何卒よろしくお願ひいたします。

<寄付金振込先> 寄付控除が受けられます

郵便振替：01020-5-39321

口座名義：社会福祉法人イエス団愛隣館研修センター

\*募金目標額：5百万円



## 編集後記

▼みなさまからのご意見ご感想お待ちしております(さ)

▼ノーベル平和賞に日本原水爆被害者団体協議会が選ばれた。核兵器の使用がどのような悲惨な結末になるのかを改めて全世界に訴える機会になった。素晴らしいことです。しかし、核兵器禁止条約が策定されても、核兵器保有国はその条約に批准していません。唯一の被爆国である日本もその条約に批准していませんし、オブザーバーとしての会議への参加もしていません。日本の安全保障がアメリカの核の傘下にあるという妄想を打ち破ることが必要だ。剣をもつものは剣にて滅ぶ。私たちができることから始めていこう。(ひ)